



Zambia

学校名：あきる野市立多西小学校

氏名：関村 由貴

担当教科：小学校全科

● 実践教科等：社会科

● 時間数：2 時間

● 対象生徒：第 6 学年

● 対象人数：33 人

1 単元名

世界の未来は君たちにかかっている～ザンビアから SDGs を知ろう～

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ・開発途上国やザンビアの文化、生活の様子を知ることを通して、世界の国々へ興味・関心をもつ。
(進んで参加する態度)
- ・ザンビア(開発途上国)の現状を知ることを通して、SDGs(世界の未来を変えるための17の目標)についての理解を深める。
(つながりを尊重する態度)

・SDGs の視点から日本の現状を見つめることによって、日本の問題に気づき、地球規模で起きている問題を自分事として捉えて自分がどう行動していくのかという考えをもつ。(つながりを尊重する態度)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る | 2 子供の多様な考えを引き出す |
| ③ 考えを深めるために対話のある活動を導入する | ④ 考えるための教材を見極めて提供する |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する | ⑥ 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る | |

4 単元の指導について

(1)教材観

日本は世界の国の中の一つの国であり、世界にはたくさんの国がある。日々国際化が進み、日本が世界の中で果たしていく役割をより一層求められていくと共に、今後世界との相互依存関係を深めていく未来が展開されていくことが予想される。そんなグローバル社会を生きていく子ども達には、地球規模で生じている課題を自分事として捉え、「持続可能な開発」に向けて、考えて行動していく力を育てていく必要があると考えている。そのために、教師海外研修で教師自身が実際に見たり聞いたり感じたりしてきたザンビアの文化や生活の様子を児童に伝えることを通して、児童に世界の国々への興味・関心をもたせたい。さらに、開発途上国が抱える問題やザンビアの現状について考えることを切り口にして児童に SDGs を紹介し、SDGs を知ることや理解を深めることを図りたい。また、私達の身近な問題が SDGs と通じていることにも気付かせ、地球規模の問題を自分事として捉えて自分がどう行動していくのかについての考えをもたせたい。

(2)児童生徒観

第 6 学年は 1 クラス 33 名前後の 3 クラス編成の学年である。今年度、私は特別支援教室(情緒教育の通級)担当であり自分のクラスで授業を行うことができないため、6 学年 3 クラスにて本単元の授業を行った。6 学年の児童とは、普段はほとんどかわりをもつことはないが、日光移動教室に引率したことから 2 泊 3 日を共に過ごした。その中で感じた印象は、皆大変素直で何事にも一生懸命に取り組み、とても気持ちの良い児童が多いということである。

本単元に関する学習としては、第 5 学年より週に 1 時間の外国語活動(英語)や児童会が中心となって毎年全校で取り組むユニセフ募金活動等がある。また、事前アンケートでは、世界の国へ興味がある児童が 3 クラスとも 25 名以上いた。また、世界で生じている問題を知っていると答えた児童が 3 クラスとも 30 名以上おり、さらに、児童が挙げた問題も「北朝鮮によるミサイル問題」や「テロ」、「トランプ

大統領」「ロシアとの北方領土問題」等の時事問題から、「地球温暖化」「酸性雨」「水不足」等の環境問題、「学校に行けない子ども」「幼くして死んでしまう子ども」「病院がない地域」等の開発途上国の貧困問題等、様々であった。

(3) 指導観

事前アンケートを行い、児童の実態を踏まえて本単元に入った。この結果を受け、児童にとって「開発途上国」や「ザンビア」、「SDGs」は初めて出会う言葉や学ぶ事柄であることが予想されたので、扱う題材や授業内容が児童の思考と乖離しないように常に児童の思考の流れに配慮しながら授業を進めていく。世界の国々で起きている問題と自分達の身近な所で起きている問題は地球規模で考えていく共通の解決課題であるということに気付ける児童が思考のつながりに配慮する。

5 評価規準

観点	社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
評価規準	・開発途上国やザンビアの文化、人々の生活の様子に興味・関心をもち、意欲的に学習している。 ・ザンビアの現状を写した写真からザンビアの「光」や「闇」を読み取ろうとしている。	・SDGs の視点から日本の現状を見つめることによって日本の問題に気付き、地球規模で起きている問題を自分事として捉えて自分がかという考えを適切に表現している。	・ザンビアの現状を写した写真から、自分なりの気付きをもち、「光」や「闇」を読み取っている。 ・地図帳で世界の国の位置等を調べている。	・ザンビアの文化や人々の生活の様子を理解している。 ・SDGs は、ザンビアの現状や日本の現状とつながっていることを理解している。
評価方法	学習の様子 ワークシート	ワークシート	学習の様子 ワークシート	学習の様子 ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界の諸問題について考えよう	○ 世界では地球規模の様々な問題が起きていることに興味・関心をもち。 ○ ザンビアの文化や生活に興味・関心をもち。	・世界で起きている問題を挙げる。 ・問題のほとんどが開発途上国で起きていることを知る。 ・開発途上国の一つであるザンビアの国の概要について知る。(ザンビアクイズ) ・「光と闇が交錯するザンビア」から、次時への課題意識をもつ。
2	ザンビアから SDGs を考えよう	○ ザンビアの「光」と「闇」を考え、ザンビアの現状に気付く。 ○ SDGs を知る。 ○ ザンビアの現状と SDGs や日本の現状と SDGs を関連づけ、SDGs への理解を深める。 ○ 世界の中の「日本」にいる私達にできることを考える。	・気付き(日本との共通点や相違点、問題点)を得て、ザンビアの暮らしの中にある「光」と「闇」を考える。(フォトランゲージ) <班活動> ・世界を変えるための17の目標として「SDGs」があることを知る。 ・ザンビアの課題とSDGsをつなげさせる。 ・SDGsの視点で日本の暮らしを見つめさせ、日本の問題(これからの目標)を見出させる。 ・本単元を通じた学習感想をもつ。

7 授業事例の紹介

小単元名【ザンビアから SDGs を考えよう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月20日(水)第5限

(イ)実施会場 第6学年3組教室

(ウ) 本時の目標

- ・ザンビアの現状から「光」と「闇」を読み取り、ザンビアの現状と SDGs のつながりに気付く。
- ・SDGs の視点から日本の現状や自分の生活を見つめ、地球規模で起きている問題について自分がどう行動していくのかという考えをもつ。

(エ) 指導のポイント

- ・前時の終末で得た「ザンビアの『光』と『闇』は何か？」という課題意識を、本時の冒頭で確認することによって、児童が視点をもちてフォトランゲージを行えるようにする。
- ・ザンビアの現状と SDGs をつなげたり、SDGs の視点から日本の現状を見つめさせたりと様々な角度から SDGs について考えさせることによって、児童が SDGs の理解を深められるようにする。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導	指導上の留意点	評価
0 分	1 前時の復習 課題意識の確認	○前時の復習 ・ザンビアの概要 ・課題意識「ザンビアの光と闇とは？」 ・本時のめあての確認 めあて1 ザンビアの光と闇は何か考えよう。	一斉		
5 分	2 ザンビアの現状	○ザンビアの様子を写した写真を見て考える。 ・気付き(日本との共通点や相違点、問題点) ・「光」か「闇」か？なぜそう思うか？	一斉 個別 班 一斉	・フォトランゲージを通して、ザンビアの「光」と「闇」に気付かせる。 ※写真入りワークシートを配布する。班ごとに意見交流をさせ、ホワイトボードに意見を集めて板書で共有する。 ・「光」、「闇」だけの写真、「光と闇」が混在している写真等、 <u>ザンビアの人々の暮らしには様々な問題があることをおさえる。</u> ・ザンビアだけでなく、 <u>世界中の国の問題</u> であることをおさえる。	・写真からザンビアの「光」や「闇」を読み取ろうとしている。(ワークシート・話し合い)
20 分	3 SDGs	○SDGsについて知る。 ・世界にはザンビアのような開発途上国がたくさんある。 ・そこで、世界中の国が「世界を変えるための目標」をつくった。	一斉		
25 分	4 ザンビアとSDGsのつながり 「SDGsの17の目標とザンビアの光と闇はどれとどれがつながっているでしょうか？」	○ザンビアの問題とSDGsのつながりを考える。 ・ザンビアとSDGsはつながっているという気付き。	一斉	・SDGsの目標を一つ一つ確認する。ワークシート配布後、難しい言葉や文言については児童が理解できるように言い換えてあげる。 ・ザンビアの問題とSDGsがつながっていることをおさえる。 ・「できている」、「できて	・ザンビアの現状とSDGsのつながりを考え、気付いている。(ワークシート・発言) ・SDGsの視点から

30分	5 日本とSDGsのつながり 「SDGsの17の目標の中で、どれができていてどれができていないですか？」	○SDGsの17の目標を切り口に自分達の生活を見つめる。 ・日本が「できている」、「できていない」と思うものを発表する。 ○本単元の学習感想を書く。 ・SDGsのこと ・世界の中の「日本」にいる私たちができること ・日本のこれからの目標	一斉 個別 一斉	いない」と判断した理由にも触れ、考えを深めさせる。 ・日本の「できていない」ことはこれからの日本の目標であることに触れる。 ・感想を書く視点を提示し、本単元のねらいにせまれるようにする。	日本の現状を見つめ、つながりに気付いている。(ワークシート・発言) ・自分がどう行動していくのかという考えをもつ。(ワークシート・発言)
35分					
45分	6 学習感想				

(2) 授業の振り返り

〈成果〉

・本時だけでなく単元を通じて児童は大変意欲的に学習に臨んでいた。ワークシートの記述や学習態度からは、児童が世界の国や問題、開発途上国について興味・関心をもち、積極的に思考している姿をうかがうことができた。児童の視野の広がりを感じた。

・児童に既有知識(世界の国や問題等)を語らせた上で、開発途上国やザンビア等の新しい学習ワードを提示したことにより、児童の興味・関心を引き出すことができた。それにより、ザンビアクイズや地図帳を使った活動等が盛り上がり、本時の課題意識の喚起にもつながった。

・児童のSDGsについての理解を深めることができた。SDGsは自分達も考えていくべきことであるという考えにまで深めることが出来た。なお、SDGsの17の目標の文言の中で難しいものは、児童がわかるよう易しい言葉で言い換えてあげた。これはとても有効だった。

〈課題〉

・授業の展開がかなり忙しくなってしまった。

改善策 SDGsについてのことやフォトランゲージでの学習活動には、児童がじっくり考えられるよう時間をしっかり確保する。

・本単元の感想では、地球規模の問題を自分事としてとらえ、自分が未来に向けてやっていきたい行動を具体的に記述する児童もいた。一方で、自分が知っている方法として「募金活動」を上げる児童もいた。

改善策 上記のような発言は、児童が国際協力のための具体的な方法として自分が今持っている知識の中から思考した考えであり、「児童の国際協力に対する姿勢が募金活動という答えに終わってしまった、これが課題だ…」と安易な見取りに終始する必要はないと考える。国際協力のための具体的な方法を知らないが故の児童の素直な反応である。したがって、児童が国際協力についての興味・関心が出てきたこのタイミングで青年海外協力隊員や現地で活躍する日本人の姿等を紹介する授業を設定する。本授業案は、2時間設定となっているが第3時として児童が国際協力のための具体的な方法を知るための内容の授業を行う。

・「SDGs」を教材化することが難しかった。

改善策 小学生の発達段階や既有知識において、SDGsをどう理解させるのかについては今後とも工夫し、研究していく必要がある。

(3) 使用教材

〈フォトランゲージで提示した写真〉





(4) 参考資料等

・国際連合広報センター

〈http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/〉(2017 年 12 月 1 日)

・JICA地球広場

どうなってるの？世界と日本

〈https://www.jica.go.jp/aboutoda/interdependence/child_world/index.html〉(2017 年 11 月 20 日)

8 単元を通した児童生徒の反応/変化

〈本単元を通しての児童の感想〉

・世界では今の自分達の暮らしとは全然違い、平和なザンビアでも闇があることがわかった。そして今の平和な暮らしでも6つの目標を知ることができた。

・私は、SDGsを知って日本もザンビアも共にがんばっていかないといけない事が分かりました。ザンビアは友好的で優しい人達だけど、その裏には、こんなにも苦勞しているのが分かって、私達は助け合っていないといけないと考えました。例えば、日本は、海がきたなく、「豊か」とは言えない状況なので海をきれいにして豊かしないとダメです。だから私達も安心しないでがんばっていかないといけない。

・私は SDGs は世界中の人に知れわたるべきだと思います。この SDGs を意識することを世界中でやれば目標を

達成できるんじゃないかと思います。そしてザンビアはまさに「光と闇が交錯しているザンビア」だと思いました。

た。①の写真も手前はひどいけど奥の家はきれいなのでそういう格差もあるのかなぁとも思いました。

・日本も SDGs の半数もできていないことがあるので、これからの日本がそれを全部、達成できたらいいなと思った。不平等をなくそうと言うのは、いじめとかをなくして、誰でも差別がないようにしていきたい。他の国でも SDGs が達成できていないところがあるので、2030年に向けて、これが全部達成できたらいいなと思った。

・SDGs の17の目標は私達にできることもあるから、できることをやっていきたい。今、私達ができることはむだづかいをしないことや食べ残しをへらすことです。私はこの学習を終えてアフリカのイメージが変わりました。でも、1番変わったのは気持ちです。今まではこわいということしか思えませんでした。でも、こわくないと思えました。

・日本はこれからまだ、たくさんの目標をクリアしていかなければならない。世界では、日本より多くの問題がある国もあるから日本では多いと思ったけど、世界はどうなんだろうと思った。ザンビアの、光と闇が交錯するという意味がわかった。これからは私達にできることは、たくさんあると思う。ザンビアだけではなく、他の地域は

〈考察〉

- ・自分達の生活とザンビア（開発途上国）の生活との違いに気付き、そこにある問題点を地球規模の問題として見出し、自分事としてとらえることができた児童がいた。
- ・アフリカのイメージや世界の国を見る目が変わった児童がいた。
- ・地球規模の問題に自分達（日本）も関わっていることがわかったという変容を示した児童がいた。
- ・SDGs は、地球規模の問題と自分達の生活とのつながりを考えるうえで有効である。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

海外派遣前は、私自身の国際協力の在り方や必要性についての理解が十分でなく、授業プランを立てること自体に大変苦労した。しかし、海外派遣前の国内研修における講義や授業プラン協議によって、国際協力についての理解を深めたり、授業のための教材研究の視点をもつ見通しがもてたりした。

海外研修中は、目にするもの全てが新鮮で、教材化したいものに溢れていた。派遣前研修でもった見通しが破綻するほどであったが、連日、参加者と協議する中で自己の思考を整理し、授業で取り上げたいポイントを絞っていった。

帰国後から授業実施までは、何度も授業プランを練り直した。児童に伝えたいことが多くあり、精査に悩んだが、他の学級を借りて授業実践を行うことからくる授業時数や内容の制約の縛りも考慮し、授業内容を吟味していった。授業実践は、授業時数と内容の精査や児童の活動の工夫等の課題も見えたが、成果として児童の変容や世界観の広がりをみることもできた。

段階	項目
P 計画	・教師の思いとザンビアでの体験をもとに授業プランを計画した。 ・授業実施学級担任と授業時数や授業内容の調整を行い、授業内容を精査した。
D 実施	・事前アンケートを行い、児童の既有知識や課題意識等の児童の実態を把握した。 ・授業の1時間目では、児童の世界の国についての既有知識やアフリカに対するイメージを語らせたり、地図帳やスライドを用いたクイズをしったりして児童の興味・関心を引き出した。 ・「ザンビアの光と闇は何か？」という課題意識をもたせてフォトランゲージに取り組ませた。
C 検証	・1時間目の「世界の国々」→「世界で起こっている問題」→「開発途上国」→「開発途上国と日本とのつながり」→「開発途上国の中のザンビア」→「ザンビアの概要（ザンビアクイズ）」→「課題意識の喚起（「ザンビアの光と闇は何か？」）」という学習の流れは、児童の思考の流れと合っていて、意欲的に授業に参加し思考する児童の姿を見ることができた。 ・2時間目のフォトランゲージでは、写真が提示されると、児童は皆真剣に写真を観ていた。驚きの声や疑問のつぶやきが自然とあがっていた。実際のフォトランゲージの活動では、写真によって児童が考えやすいものと考えにくいものがあった。時間の関係上、班ごとの意見は児童ではなく教師が発表した。 ・2時間目のSDGsについての理解についての活動では、難しい内容であったが、児童はよく考え取り組んでいた。
A 改善	・フォトランゲージの取り組みせ方については、写真を提示する際に写真の内容をある程度説明したり、1枚の写真について児童にもっと熟考、議論させたり等工夫していく。時間の確保も必要。

10 教師海外研修に参加して

教師海外研修に参加しての一番の収穫は、国際協力に対する自己理解が深まったことである。今まで国際協力に対してもっていたイメージは、先進国が後進国に施しを与えるというものであったが、教師海外研修を通じて、そのイメージは一新された。ザンビアの現実やそこで活躍する日本人の姿、ザンビアと日本のつながりをこの目で見て考えていく中で、国際協力とは国と国との相互関係で成り立っていること、国同士が地球規模の問題を共に考え乗り越えていくための方法の一つであること等、たくさんの学びを得て、自己の考えの変容を感じることができた。

授業実践については、ザンビアでの体験（自己の考えの変容体験）を子ども達にも追体験させたいという思いを土台に計画した。また、そこで大切にしたいことは、ザンビアにて特に印象に残った風景（写真）やキーワード（「眩い光と底なしの闇のザンビア」）である。ザンビアで見つけた「生きた教材」によって、子ども達は地球規模の問題に触れ、思考し、世界観を広げることができたと考えている。

世界の中で生きる私が今できる国際協力は、子ども達が世界に目を向け、世界観を広げられるよう

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

な授業を実践していくことであると考えている。そのために、学び続け、自己研鑽に励んでいきたい。